

【郵便振替】 01170-1-81313

【E-mail】 contact@oisp.jp

【Home Page】 http://oisp.jp/

【Net Forum】 準備中

【代表者】 山本 晴義(校長)

【発行者】 平等 文博(運営委員長)

【編集者】 平等 文博

養老孟司『バカの壁』をどのように解剖するか

よろず、ひまじめ大好き(企画) 破僞否僞弥 徹

中村 徹(会員)

『バカの壁』が、「新書出版数の新記録を更新中、309万部(超308万部)」と聞いたのが今年2月初め。3月末では336万部を超えて、なお書店の売上げの上位を維持しているとのこと。ちなみに大阪市立図書館の本書の蔵書数は112冊、4月1日現在での予約数1,341件。

『バカの壁』は、昨年末の入院中に手に入れたが、体調の悪さもあり「なんじゃこりゃー」と、ほり出したまま。「超308万部」と聞き、2月から再び読み出した。なれど良く解からん。再読の途中、むかついたのは、第7章「教育の怪しさ」。破僞否僞弥流理解によると、養老先生の主張は「偏差値教育で、東大にバカ学生を送り込んでくるのは、すべて団塊世代の責任」。小生の感想は「養老先生は、東大全共闘によほどえらい目に合わされはったんや」。しかし、小生も同じ団塊世代のリストラ無職。教育現場で「苦悩・苦闘」している同世代の知人もいる。ほんまむかつく。

そこで気が付いた。「養老氏の『バカの壁』には、現状(体制・制度)への分析・批判が、まったくない」。そして、「この『バカの壁』が、なぜ「バ

カ受け」しているのかを解剖する必要がある。」

「バカ本、バカ売れ」を考える。

1. 2003年「バカ本」大バカ発

インターネットから採取した、編集担当者のインタビューを読むと、『バカの壁』の出版前に「バカ本」が多数出版されている、「バカ本」コーナーを設けた書店もある、とのこと。

そこで、再度インターネットで調べてみた。すると、書名に「バカ」あるいは、売り文句に「バカ」が入っている出版物は、2000年32件、2001年59件(対前年1.8倍)、2003年88件(対前年1.5倍)。<バカボン等のぞく>2003年/2001年、2.8倍。ほんまに大バカ発じゃ。ちなみに「アホ本」は、2002年7件、2003年10件。(日本図書総目録から、紀伊国屋書店の検索ページを利用して)

2. 流行の言葉から考える。

「バカ」の語感から連想される語彙は、自損系として、「諧謔」「自虐」。他損系として、「攻撃」「非難」「拒絶」「排除」「虐待」「いじめ」。これらは、「私

の価値判断」にもとづく、「私」の、他者・他在に対する、敵対的な言葉・意識・行動に関連している。

「癒し系」「和み系」「燃焼系」「健康系」からは、「私自身の心」「私自身の体」と、「私の価値判断(主観)」へのこだわりと、傾斜が読み取れる。

上記2項とも、他者・他在との関係の軽視・拒絶の異なる2方向への傾向を表しているのかも知れない。

もう一つ、破偈否偈弥流着目点は、「やばい」から「チョーやばい」への変化。これも「判断基準の主観可」の例証。

それでは、なぜこのような、判断・行動基準の「主観化」が進行するのか。

3. 「公的・社会的価値観」のゆらぎ

戦後日本を、破偈否偈弥流に3分割でみると、60年ころまでは、「戦後民主主義」の展開期？学校では「平和と民主主義」、なれど、家庭の中では「親父第一主義」。60年～80年代、日本型フォーディズム勃興、発展期。乱痴気の終宴「バブル」を経て、90年代からは、競争万能の市場主義・グローバリズムの時代。

時代の変遷につれて、大きく「公的・社会的価値観」が、ゆらぎ変化している。教育の世界では「『思想・信条の自由は基本的人権』と教えた、その場その翌日に、不起立教師の大処分」「偏差値重視の輪切り進学・就職」から「特区活用の個性重視教育」。大学は「良くも悪くも建前平等」から、「競争重視、階層化の容認をへて、大学淘汰」。会社は「終身雇用、年功序列」から「実力主義、解雇あり」政治の世界では「憲法9条とイラク出兵。国際協力はアメリカ協力」。「年金問題お先真っ暗?」。また、階層間上昇の機会は激烈となり、少なくなっている。階層再生産の固定化は進行している。転落は、即、明日始まる。(※1)

これでは、誰もが「バカかー！」と叫んで、束の間の溜飲を下げるしかないか。

こうした、「公的・社会的価値観」のゆらぎ、

あるいは「新・旧価値観」の混在が、アノミー状況(※2)を強めている。「一人ひっそりと癒し・和み」、他者と他在との「参加・交流(批判と反批判)」を拒む状況を生じさせている。また「共感⇔共創⇔連帯」のサイクルを分断・崩壊させている。

4. アノミーの蔓延のもたらすもの

タルコット・パーソンズは「第一次世界大戦後の西欧(欧州・USA)は、大規模なアノミーを不可避にするほどの、急速で根本的な変動の時代にあった」とし、このアノミー下で「強力な権威や厳格な団体精神を求めるドイツではファシズムを生み出した」とする。そして「自由と民主主義」の伝統を持つアメリカは「アメリカ的理想」を基盤に、アノミーを克服すべく「反ファシズム」の立場に立つべし」と。(※3)

現在のUSAは、多国籍企業の繁栄と経営者のモラル崩壊、国内産業の空洞化、少数の勝者と大多数の敗者への2極分解のアノミー状況下で、「9.11」を契機に、アフガニスタン攻撃とイラク侵攻に手を染めた。

日本国内も、この「バカ大バカ発」のアノミー状態は、「拉致問題」「イラク支援」「尖閣＝魚釣諸島問題」を契機に「<癒しの>ナショナリズム」が「熱狂的愛国ナショナリズム」へと変化することを準備しているのかもしれない。

「バカ壁」を解剖する

1. 「バカ壁」のできるまで

この書物は、養老氏の約10時間弱のインタビューを元に、担当編集者がリライトしたもの。題名は、養老氏の20年ほど前の著書『形を読む』から採録された。

2. 養老科学・養老博学・養老哲学の混合物

この『バカ壁』は、新潮文庫編集者の「売れば勝ち組」との思惑と、養老氏の「科学(脳)論」「博学」「哲学」の混合物から構成されている。種本は、養老氏の「唯脳論」と、これを拡張した「人間科学」の両書の内容が、新書版(P

204)に簡略化され・支離滅裂に配置されている。前後あい矛盾するところもあり、それだけでも理解が困難となっている。

3. 『バカの壁』解剖

「破偈否偈弥流、編論・奇論」

もともと「ひまじめ」大好きは、「生真面目」「小まめ」「くそまじめ」が大嫌い。系統的・論理的解剖などできるはずもなく。もっぱら「臭覚」をたよりに「破偈否偈弥流、編論・奇論」で、気にかかるところの解剖に挑戦してみたい。

「分析仮説-1」

養老先生は、人を「幻惑する」のがお好き。「常識」「知識」「現実」「事実」「科学」「共通了解」「共同体」「個性」「一元論」「原理主義」「多元論」が、各章に幻惑的に散布されている。どこかインチキ臭い。

『バカ壁』では省略されているが、『唯脳論』の中で養老氏は、近代思想の父と称されているデカルトの「コギトエルゴスム」に触れている。「我＝脳」の例証として。養老的「我＝脳」論は別としても、近代「自我」の確立が、「自由・平等・(博愛)」を基本理念とする「近代民主主義」を導き出し、「自由と平等」の衡量・攻防の歴史の中で、日本の憲法にも続く「基本的人権」が導きだされてきた。養老氏の、それぞれの「言葉・語彙・規定」への「不可知性」の言及、また「共通了解」と「個性」を二律背反として対置する論議の進め方は、「基本的人間の権利＝存在・尊厳」への否定につながるもの。この物言いは、養老氏から「一元論」壁に塗込められるのかもしれない。

「分析仮説-2」

養老先生は、「機能的分業＝階層化」容認か？第8章で、この本の評判を高らかしめた、「カースト制は、究極的なワークシェアリング」(p178)に言及しておられる。後段では「機能主義的分業の必要性」を「社会的公平を保つための非常に大きな問題」として。

養老氏の「からだの見方」(p215)に、利根

川氏のノーベル賞受賞に関するテレビからのインタビューを断る、養老氏の日茶苦茶流謝絶の言葉が記載されている。「東大は我が国の学問の物差しである。物差しは賞を出す方で、賞を貰う方ではない。物差しに賞をやる馬鹿はいない。ノーベル賞委員会には誰もノーベル賞を渡さない。」

上記の2本の「不変情報」を、「ジョーク」は本音が見えるとの、いやみな破偈否偈弥流解釈で、ちょっと強引だが、以下に展開してみると。

「日本の学術・科学技術の物差しである、東京大学を頂点とする大学の機能主義分業は、当然として必要である(大学の階層化も必要、卒業生も階層の上位に立つべし)。この「尺たる」東京大学に、バカな学生を送り込んでくる、団塊世代(全共闘)はけしからん。」となる。

「分析仮説-3」

養老先生の、 $Y = aX$ の秘密。

そやけど、なんでこんなに簡単にするのやる。なんか怪しい。

ここで、「人間は、社会関係のアンサンブル」を思い起こす。 $Y = aX$ は、「人間は入力情報さえも、自己が生まれ育った社会関係(環境)から獲得した価値判断によって取捨選択すること」を軽視・切り捨てしているのではないだろうか。「人間理解と批判」は「社会総体の理解と批判」を前提とする。価値判断＝倫理(イデオロギー)の軽視・切捨ては、「社会総体の理解と批判」の軽視・切捨てにつながる。

養老氏は『バカの壁』のなかで「外務省」「オウム」を批判的に取り上げてはいる。しかし「教育問題」では「すべての責任は団塊の世代」とし、教育をとりまく「経済社会」「政治社会」そして「教育行政」「教育現場」を一切捨象する。

「 $Y = aX$ 」に、この秘密がひそんでいるのか。(あっ！ここで時間(原稿締め切り)となりました。後は大阪哲学学校会場で。)

「分析仮説-4」

養老先生は、天皇を中心とした、多元論的「共

同体」がお好き。

「分析仮説-5」

養老先生は、「戦後民主主義」お嫌いですか。

「分析仮説-6」

養老先生は、「欲」=「即(宝)物論」は、どこから生まれるのかを、いかがお考えでしょうか。

「分析仮説-7」

養老先生、「世界の3分の2を占める、一元論的原理主義に対抗して」「八百万の神々のおはします日本の理想的共同体」の「壁」の樹立だけで、ほんまにええんでおましょるか。

「コビットエスカルゴスム(小人住蝸牛)」

高橋準二氏の著作「科学知と人間理解」(新泉社)第二章項6「暫定的まとめ」に「この巨大なブラックボックス(遺伝子・脳)をく推察>することによって<生物学的人間論>が展開される。この<推察>の中に、論者の社会観・倫理感が否応なく注ぎこまれる。明示的であろうが、隠されていようが。(ただしこれらの論は単なる思弁ではなく、経験的事実が例証として挙げられる)。これらを批判的に抽出・収集すれば、現在利用可能なく生物学的人間理解>の最良も

のが入手できる可能性がある。」と記されている。

果たして、「養老本」から「最良なものが入手」可能だろうか。

現代民主主義の共通了解としての、多元的な「生存(安全)・自由・平等・連帯」の再確認。そして、この作業のための「参加⇔批判・反批判(傷つき)⇔共感⇔共創・連帯のサイクル」の再構築が必要ではないだろうか。

養老氏の「壁」の前に、たたずむだけでは、「コビットエスカルゴスム(小人住蝸牛)」。になってしまう。

(※1)1980年以降の「教育問題」

「ゆとり教育から個性浪費社会」岩木秀夫(ちくま新書2003年)に詳しく分析してある。

(※2)アノミー:「あっ蚤ー!」ではない。

(※3)タルコット・パーソンズ

参照「対話現代アメリカ社会思想」山本春義著(ミネルヴァ書房2004年)

同「現代アメリカ社会とパーソンズ」高城和義著(日本評論社1988年)

アメリカの「新保守主義」「反知性主義」の理解に、この2冊は役立つ。

『バカの壁』 討論会を前にして

— 「同じ」と「違い」について

松尾 猛省 (会員)

「バカの壁」の討論会を前にして思うことを少し述べたい。私も当初、本書を読んだものの、もう一つ養老さんのいっている意味ががよくわからないところもあった。

「話せばわかるは大嘘」というところで、男性が出産のビデオを見ても女性ほどの感動もなく、どこかでみたような話で済ますということは何となく分かるものの、それは女性にとって出産は人ごとでなく、いつか自分という切羽詰っ

たものであり、男性にとっては経験することではなく、まあ知識として見ておいてもという、受け取り方においても既にその時点で両者の間に差異が見られるのである。

養老さんはそれについて、男性はきっぱり情報を遮断しているといいかたで、男性を裁断、「バカの壁」を示唆している。また、その後で「何でも説明さえすればわかるように思うのは、どこかおかしいということが分かっていない」と

か。

これは、なんでも説明さえすればわかるのですか。近ごろの学生はことにその傾向がつよいが、出産の苦しみを説明しても男がそれを分かりますか、それを完全に分かるのは経験したものでなければ分からないという。これについては、それでは養老さんは経験もしないのにそれが分かるのですかの反論もある。

昨秋10、13付朝日で西 研氏(京都精華大)は本書について次のように述べていたのを読んでいたの、少し掲げてみよう。養老さんのいう「馬鹿の壁」とはあくまでも自分のなかの壁、自分が分かるもの以外から目をふさいでいるということだ。しかも自分ではすべて分かるつもりになっていて、どんなことにも「分かりやすさ」を平気で要求する。世の中にわからないことがたくさんあることが、分からなくなっている。これが養老さんのいう「馬鹿の壁」なのだ。…ことに若者の、極端に言えば、教師を情報を提供するマシンのように思っている。「わからなさ」を書きながら一步一步確かめるような、そういう手つきも感覚も失われている。他人が分からないものであるように、よく考えても、自分もまた分からない者だ。なぜかある音楽に強く心を動かされたり、なぜかとつぜん恋してしまったりするように。…いま私たちの社会ではそういう次元が衰弱しつつあるとの西氏の説であるが、その風潮になんとなく頷けるところもある。

また、池田晶子氏も何かの本で「養老孟司さん」にふれていた。養老さんが東大を自主退官されたとき、「文春」に寄せた「さらば東大、象牙の塔」を読んでのことである。

—学生は解剖を覚えてくれると思っているが、私が教えるのは死体とは何かである。その答えは実は私だ、というものである。それなら教えることがない。—禅問答みたいになったが、これが本当だからどうしようもない。ほかの解剖学者はそんなこと言わないだろう。そうかもし

れない。しかし、私は他人のことは知らない。私はこうだといえるだけである。

死者を数十年扱って、私は死者は私だという結論を出した。正確さを好むなら、未来の私だといってもいい。そんなことは解剖なんかしなくとも、わかりきったことでないか、そう思われるとしたら、あなたは私よりもはるかに伶俐なだけである。私は30年かかってそれに気が付いた。だから大学の教授は馬鹿だと世間では言う。(「文芸春秋」95、5月号)

池田氏はこれについて、お利巧なだけの受験秀才には、言われていることは間違ってもわかるまい、そのことが私にははっきりとわかる。…「死体とは何か」「それは私だ」お伶俐さんに禅問答を教える以上の苦痛を私は感じる、東大医学部、天下のお伶俐さんの集うところで30年、(科学)によつて「科学以前」をこそ伝授しようと努めてきた養老教授の苦勞は、やっぱり徒勞だったんだろうなど。

主著(唯脳論)の誤解のされ方、理解のされなさもこれと同じである。

唯脳論は唯心論を唯物的に語るための方法である。心が先、物質が先なのでもない。(目の前に死んだ人が一人、存在する。それを私は見て、そこに自然を発見した)そういう心境を知らずに、いきなり科学を始めているからである。以下は唯脳論からの引用である。

〈唯脳論は、世界を脳の産物だとするものでない。前章で述べたように、意識的活動が脳の産物だという、当たり前のことを述べているだけである〉

〈解剖なんかしなくとも、わかりきったことではないか〉 そうだ、何かもわかりきったことなのだ。ただ、養老氏はそのわかりきったことを、わかりきったことであると「発見した」「気が付いた」そこが違う。天才だけが知る(存在)への驚きである。科学は多分そこから始まるのかもしれない。この驚きを知らずに始められる科学など、少なくとも私にはちっとも面白くもな

いと池田氏は述べ、「在ること」の驚きをもるに嘔みしめ、この驚きということだけは教えることも不可、各自に考えてもらうしかないと主張し「人生、これでいいのか」それなら死体を眺めて考えてみな、これが養老先生のメッセージなのだ。

〈私は死体という自然にはりつけになって生きてきた。世の中がどう変わろうと、死んだ人は変わらない。変らないものに依拠すれば、時代の変化の影響を受けない。私はそう思っていた。そうではなかった。変らないものに依拠するからこそ、時代の影響を明白に知るのである〉
 (「さらば象牙の塔」養老孟司の結びで、池田氏は唯脳論の根本テーゼといっている)

養老孟司氏は現代の我々の脳味噌になった。それは定点であるが故に盲点である。見ようと思えばそこになく、見てない時にはありすぎる。—池田氏の結びの言葉である。

また、「リコウノ壁とバカの壁」の木村氏は端的に「バカの壁」は閉塞状況にあるといわれる現代社会のさまざまな出来事を理解するための啓示を与え、また、本書の理解の困難さは養老さんご自慢の脳の構造に原因がありそうだともいっている。

なににしる、バカの壁はすんなりと人の脳に入ってこないところがあることも事実である。また、人により色んな見方、考え方があっても当然である。

最後に、『「バカの壁」のむこう側』と題するコピーライターの糸井重里さんとの対談(論壇03、12月号)の冒頭で司会者も、『大ヒットの本書を読んでも、(バカの壁)について直接説明されているのは10数ページ、「我々は自分の脳が理解できる範囲にしか物事を理解できない」という部分は分かるものの、依然として「何だかよくわからない」という印象が残る」と話すごとく、即座にはわかりにくいのが、本書の特徴ともいえる。

そのわかり難い本が何故これほど売れ、ロン
 大阪哲学学校通信 No.28

グセラーが続くのか、哲学学校でもその謎を解こうということで、討論会の企画となったのであるが、その口火をとということで、あれこれとその関連書物に目を通して、浅学の私自身未だによくわからないことだらけである。そのなかに、養老先生についてひとつ思うことは、市井の学者らしからぬ無類の昆虫好きが、部外者の私にはわからないほどひっかかってくる。解剖学者はまた一面、脳科学者ともいわれるが、その研究の余暇に、虫捕りに現場に赴き、日本は北から南の果てまで、それがベトナム、東南アジア、中近東様々な国々に出かけ、虫取りに夢中になるといふ、その情熱には辟易の感すら覚える、その中には蚤の標本づくりもある。それにはボール紙を三角に切りその先端を折り曲げ貼り付けるといふ。奥さんがふと傍で喧かれる。「私たち毎晩、傘張りしているんですね」のことばのなかに、人からの頼まれものでもなく、また、それに一円の報酬があるわけでもない仕事だけに、その風変わりの学者の映像を思い浮かべ、その情熱に何かいい難きものを覚えたのである。

その養老さんが問い続けているものに、(同じ)と(違い)があり、同じ種類の昆虫でも場所により、地域により全く違うという自然の形態、その自然の不思議さに驚き、じっと観察し続けるひとつの執念とその慧眼にふと、養老さんはその小さな虫を通して、世の中や、社会を、いや、世界を見つめているのではないのかと、その思いもよぎるのである。

先の対談の冒頭に、文明社会が前提としてきたものに、ひょっとして「おかしいんじゃないか」といったことを話しているんだから、それはすぐにはわかりませんよ。

いわば、養老さんは人間がいままで当たり前
 に思い、至極当然としてきたものに、挑戦状をつきつけた形だから、ちょっとやそつではわからないのが当たり前ですよと、涼しい顔である。

その前提が「同じ」と「違い」討論会はまさにそれをポイントにひろがりそうである。さあ、はたしてそれが、すんなりとわかるであろうか、それはまた、変わると変わらないに変形される。

固定観念から柔軟な思考へ、当たり前を問いただす、さまざまな問題提起がその背後にありそうである。以上が討論会を前にして私の思うことである。

「君が代」と教育現場

藤田 友治（会員）

今年もまた教育現場で「日の丸」・「君が代」をめぐって管理職と教職員の鋭い対立があります。かつて大阪哲学学校主催で「天皇制を哲学する」のシンポジウムで私が報告しましたが、この問題は戦後の教育における戦争責任の問題、天皇制をどう捉えるかという問題、思想・良心の自由をどう守るかという問題にかかわってきます（詳細は『天皇制を哲学する』三一書房をご参照ください）。

東京の卒業式における「不起立宣言」とその処分も思想・良心の自由をどう守るかの問題に、教員としての良心をかけた抵抗です。大阪の場合もさまざまな抵抗がなお続いています。たとえば、ある府立高校（S工業高校・定時制）の場合生徒の親の国籍の全ての「国歌」を「式」の前に「敬意」をはらってテープを流します。韓国、ブラジル、中国、……。ここでは「君が代」は相対化され、また生徒、教職員は全員着席しています。管理職と教育委員会の人と一部の来賓のみ起立しています。

国際理解・異文化理解、反差別人権、がカリキュラムの中にあり、日常的に「アジアにおける平和学習（天皇制と「君が代」の果たした役割）」として授業の中で取組まれています。この問題では以前は物理的な抵抗もありました。たとえば、「日の丸」を降ろし、揚げさせない取り組みもありました。しかし、このことによって問題は物理的に考えられる傾向が強められていきました。「揚げさせる」「揚げさせない」・「歌わせる」「歌わせない」の攻防戦はすべて使役動詞となっ

ていますように、教育をめぐる知的モラル的ヘゲモニーの戦いが物理的抵抗の局面に矮小化されていきました。

そして「不幸な対立」（たとえば広島の高校の校長の自殺など、校長への教育委員会の強制が一層強められ、その結果の板ばさみによる）が起こりました。結局、「国旗」「国歌」の法律制定が一挙に行なわれました。その後、物理的な抵抗には処分が厳しく、さらに問題は物理的な抵抗だけではなく、思想・良心の自由をどう守るかの問題、天皇制と「君が代」の果たした役割を徹底的に追及するという問題として、すぐれて教育・思想の問題、国際理解・異文化理解、反差別人権というカリキュラムの問題へと深めて考える方向も出てきました。この方向が私のかかわってきた方針です。

さらに、一層根源的に考えて、これまでの一切の「君が代」論は「天皇」（それでないばあいも「あなた」「君」）の「賀」の歌として理解されてきましたが、果たしてそれでいいのだろうか、という問いが立てられてきました。

拙論「「君が代」の源流」（『「君が代」うずまく源流』新泉社、1991年）のなげかけた問題提起をまともに受けられ、しかも一層発展して、問題を深められた論が二論文あります。一つは、古田武彦氏（昭和薬科大学元教授）の『「君が代」は九州王朝の讃歌』（新泉社、1990年）、『「君が代」を深く考える』五月書房、2000年）の「君が代」論です。天皇制の讃歌でなく、それによって滅亡させられた「九州王朝」（この概

念は詳しくは拙論「多元史観と九州王朝説」『季報・唯物論研究』87号、2004年2月をご参照ください)の讃歌であると捉えました。

そもそも戦前・戦中に、学校教育を通じ「君が代」は「天皇陛下のお治めになる御代は千年も万年もつづいておさかえになりますように」(『尋常小学校初等科修身二』1942年)と儀式を通じくりかえし、教えられてきました。ここでは、「君」とは何の疑問もなく、天皇でした。天皇を現人神あらひとがみとし、天皇に忠誠を誓うことで、日本国民は天皇の臣下として、「大東亜共栄圏」のアイデンティティを確認する作用を果たしてきました。もとより、外国人にとっては「強制」でした。ここに戦争責任の問題と合わせ、「大東亜共栄圏」のときの被支配民族(朝鮮人、中国人など)に今日なお深い嫌悪感を与えている問題があるのです。

今日歌われている曲は、よく知られているように、明治3(1870)年薩摩藩の砲兵隊長(後の陸軍大臣)大山巖らが「天皇に対し奉る礼曲」を選曲するよう依頼されたことからです。大山は藩軍楽隊長フェントンに作曲させましたが、「不評」でした。宮内省はエッケルトに編曲させ、明治13(1880)年宮中の天長節で初めて演奏されました。「君が代」は『古今和歌集』巻七、「読み人しらず」にあるのはよく知られていますね。

我が君は 千代にましませ さざれ石の
巖となりて 苔のむすまで

これを、徹底的に分析してみました。詳しくは拙論「君が代」の死生観(『季報・唯物論研究』84号、2003年5月)をご参照ください。ここでは、頁の関係で触れません。

さらに、拙論「君が代」論の問題提起に対して真剣に受け止められて、新たに根本的に論を進められたのが、溝口貞彦氏(二松學舎大学教授)の「君が代」考(『二松學舎大学人文論叢』第69輯、2002年10月、二松學舎大学人文学会)です。

拙論は「細石を小さな石とし、巖を巨岩とするとき、小さな石が大きな岩にどうして生成・発展するのか。非科学的でナンセンスでないのか」と問題提起をしました。

溝口氏はこの問題提起を真正面から受け止められて論をたてられたのです。溝口氏は「君が代」の解釈を『古今和歌集通解』(金子元臣)から、「我君」は「君は二人称の代名詞で、天子の事でない」を参考としうるとみました。さらに、「君が代」の歌詞の分析を通じ、「君が代」は賀の歌ではなく、挽歌であると結論づけられています。次のような根拠です。

①「君が代」の歌は賀の歌よりも、挽歌の先の天智天皇臨終の歌に近い。

②『万葉集』では、「巖」の語は、死と墓場を意味している。

③「さざれいしの 巖となりて苔のむすまで」は挽歌のテーマである死と再生(転生)が歌いこまれている。

④「我君は」の歌の本歌である「妹が名は」の歌は水死した乙女のための鎮魂歌である。

「死」は何人も逃れることはできません。人間はもとより、生命あるすべてのものは逃れることはできないのは自明です。古代人にとっては、「私」の「死」よりも恐ろしいのは「太陽」の「死」です。「私」はひとりの死ですが、「太陽」の「死」はすべてのものの「死」であるからです。「死」と「再生」というテーマは「さざれ石の巖となりて、苔のむすまで」と永遠の命を歌うのです。「死」と「再生」を願うのは、賀歌ではなく、であるからです。天皇制と「君が代」の果たした役割をこれからも一層明確にして生きたいと思えます。

「君が代」は「挽歌」であったという論をさらに展開して、もっと「死者」(戦争で死んだひとたち)に思いを刻みつけたいと思えます。

4月25日の大阪哲学学校では参加者の皆さんと私は上のような話をして、さらに意見の交流をしたいと思えます。

学び方、学問をする態度について

— 『マックス・ウェーバーの犯罪』論争から

高根 英博（会員）

『マックス・ウェーバーの犯罪』（羽入辰郎著・ミネルヴァ書房2002、以下『犯罪』）という刺激的なタイトルの本があります。その内容とはいうと、有名なウェーバーの著作『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（以下『プロ倫』）の典拠の間違いやごまかしを指摘するというものです。山本七平賞も受賞して評判になった本ですが、その「犯罪」的作為性を指摘するだけで、『プロ倫』の中味そのもののギロンは一切しないという本でもありました。

それに対して、ウェーバー学者の折原浩氏が反論し（『ヴェーバー学のすすめ』未来社2003）、ウェーバーを擁護し、『プロ倫』の典拠の正当性を説き、「犯罪」という断罪する態度、またそれだけで手柄をとったような態度を厳しく非難したのでした。その後、雑誌やインターネットを介して、山本七平賞の審査員（養老猛司氏や山折哲雄氏ら）の姿勢、羽入氏のまわりのウェーバー学者の研究態度、の反省をせまり、その名もあげて論争を誘うのでした（04年3月現在はまだこの段階）。

折原浩氏は、60年代末の東大闘争時に、闘争を支援する側に立ち、ウェーバー学者の立場から、大学側の対応を批判し、学問の在り方について、問いを投げかける学者でした。私も、そもそも『犯罪』のギロンの方法に関して、その内容そのものを問うことなく、いわゆる用語だけの「あら探し」だけで成り立つこの本をかいま見て、これが学問か、これが最近の学問か、とあきれ果てていたのでした。これでは折原氏が怒るのも当然といえます（折原氏は東大闘争時と、それから中沢新一氏の東大就職問題の時

も反中沢の立場を表明していた。これも学問論において意義深いと思う）。もともと東大闘争は、学問のあり方の問い直し、学問の社会的な関係性、そして大学、学問の自己否定という問題を担う論争でもありました（大学紛争のそのテーマについては、文学者では京大の高橋和巳が当時そのギロンをしていた）。『犯罪』論争における折原氏の態度は、この東大闘争での学問論を受け継ぐものだと私は見えています。

ウェーバーの学問論自体、確かに真摯な態度や責任倫理の要請とか、没意味論や精神なき専門人の指摘があります。また経験科学としての社会学なり社会科学の方法論をもちます。哲学的ベースにはカントがあったり（不可知論）、ニーチェの影響も最近ギロンされますし、なによりもキリスト教のエートスが最も重要だと私は思っています。それとかさなるように折原氏があり、実存の問題として折原氏はウェーバーを語っています（キリスト教のギロンをする滝沢克己の影響も折原にはあります）。そこから彼の学問への態度があるように思います。それは東洋的な寛容な態度（日本人は棲み分けという序列を好み、論争をさける態度、西田哲学がそう）ではなく、真理への不断の緊張と希求の態度です。私は、ウェーバーはナショナリストで帝国主義者だと否定的なのですが（ローザ・ルクセンブルクを評価している）、この折原を紹介したウェーバー像には学ぶことが大です。

また、90年代に、駒沢大学の先生（袴谷憲昭氏と松本史朗氏ら）による、いわゆる批判仏教のギロンが起りましたが、これも、学問論としての大学紛争の学問の問い直しのギロンを

継承するものと見ています(本人たちは一言もそうとはいいませんが)。批判仏教のギロンと折原氏のギロンに共通性をみるのです。批判的精神の欠如した学問なりギロンを批判し、論争材料を提示し、コトバによる正しさを追求する姿勢です。どこまでそれが日本のなかで一般化できるかは、困難が予想されるが(両方とも孤立しているのは事実)、この二つの提起は良質なものであり、現在の大きな学問上の課題として注目しなければならないと考えています。その提起は、丸山真男が、戦後の民主主義の形成の問題として提起した「『である』ことと『する』こと」に象徴される、市民社会における主体的な活動の要請に呼応するものでもあると思っています。

そこで、ウェーバーの学問に対する態度で、私が学んだなかに、「対象そのものに」というのがあります。イデオロギー(例えば「マルクス主義」)の進歩史観なり目的論から演繹するとならえ方ではなく観察対象に即して観察するという方法(これに「マルクス主義」は足元をすくわれることとなった)。それから学(科学・経験科学)は乗り越えられる運命をもつという態度です。それは、よくありがちな論争での「論破する」という発想、人対人で勝敗・優劣を決める態度(スポーツだってその競技に対しての勝負

であって、競技者の全存在の勝負ではないのは当然である)、自己の世界観の表明だけで終わる態度、また相手の意見を決めてかかる態度、をいましめるということを意味します。ウェーバーは、研究において早すぎる結論に自己規定されて、研究に支障がでてしまうこともいっていたと思います。人の評価としての論争ではなく、対象の観察上での論争でなければいけないということです。『犯罪』論争は一見、人格的な非難に見えますが、折原氏はこの原則を語っていると私は判断しています。つまり『マックス・ウェーバーの犯罪』はこの原則を全く逸脱したということです。またこんな戯れの不毛な罵倒するだけのギロンが日本にはあまりにも多すぎるということです。



大阪哲学学校活動年譜 (「通信」27号発行以降)

2004. 1.31. 「大阪哲学学校通信」第27号発行
- 1.31. 「社会福祉のトレンドを読む—公的責任の後退と「自立」のすすめへの警戒」
.....講師・大野光彦
- 2.14. 「10年スパンの予測され得る世界の経済状況と今後10年くらいの間のいくつかのシナリオ」
.....講師・堺 寿一
- 2.28. 読書会「山本晴義『対話・現代アメリカの社会思想』を読む」(1)
.....チューター・山本晴義
- 2.29. 定例運営委員会
- 3.13. 読書会「山本晴義『対話・現代アメリカの社会思想』を読む」(2)
- 3.27. 読書会「山本晴義『対話・現代アメリカの社会思想』を読む」(3)

「通信」第27号を読んで

中村 りょう子（会員）

卒業シーズンです。御多忙のことと拝察申します。

「大阪哲学学校通信」第27号について、所感を述べます。

“アウシュビッツ生還者たちの自死”にて、フリーモ・レーヴィという未知の化学者の立場とその後の人生と遺された言葉を教わって、

- ・人の体験はみんなひとりひとり違っている。
- ・苛烈な運命の渦中ほど、万人が万人個々の位置、視座があり、各々限られた諸関係性においての経験であること。
- ・幸福感には誰もがたまかな共有、安堵が持て、圏外、部外の者にも想像は可能である事の当たり前さに気が付きます。

そのことに連ねて、戦場、ラーゲリ、大惨事、秘かな権力中枢の奥での粛清、事実等々、紙一重の偶然や伏線に導かれた命運の差に思いが及びます。

平等さんの御文中“ヴァルネラビリティという言葉……(略)……かろうじて保たれているだけなのかもしれないと強く思った。”のとことと、レーヴィの自死への御考察に、まこと、同じ感慨を深く致します。我が身を含めて人の心の当てにならぬ事、普通の暮らしの中でさえ。

アウシュビッツの暴虐はここで一旦脇に置きます。先日新聞紙上で知った中学生男子への家庭内虐待の異常さが頭を離れません。私のごく身近で数年前、二十歳と二十一歳男性、前者は自死、後者は(統合失調ではありません)精神病院内にて頻々と暴力を受け、最後に両親が気づき、家へ連れ戻しましたが、直後に亡くなりましたそうです。(余談ですが知人の痛恨事な

のでずっと気になり、精神病院の草分け、十九世紀フランスの「ブランシュ先生の精神病院」を読みました。興味深い本でした。)

又、五十代半ばの男性は、七、八歳頃、継母の虐待に耐えかね実母の元へ逃げました。後年四十を過ぎて、しばしば神経症や内臓疾患がくり返され、又、時々幼児返りの如くひとり言や児童のような振る舞い、他者への警戒心が亢じて、家族以外の人と関わることがない。青年期には大いに友人達と冒険旅行もしたそうです。

人間の生身は肉体的苦痛が頂点に達した時、気絶する救いの機能を持っています。精神的虐待にも耐えかねた時、何かが壊れる(必ずしも直後、直接でなく)ことで傷ついた形にしる、自我は辛うじて保たれるのだらうかと考えてみます。

ここでアウシュビッツに戻り、レーヴィの言う“灰色の領域”という「域」について考えますと、私達人間という在り方には、常に、精神構造、心の文化、生い立ちの歴史、による差があるので、はっとさせられるのは、私も“灰色の領域”で苦しいことが多いのです。ご存知でしょうか。

詩人・石原吉郎「望郷と海」(ちくま文庫)はシベリア抑留の体験です。私は石原自身より、この中に記されている二人の人物(鹿野武一、管季治)のその後が気になって、読後数年を経て探し読み、二人とも自死であることに衝撃を受けました。ずっと「何故」と心の隅に思いつづけていますが、この“灰色の領域”の「域」内も色々であることが、或る手がかりとなりました。

倫理学がご専門の平等さん、木村さんに（数年前の唯研の高倉テルについてと鶴見俊輔氏のこと、強く印象しています）願わくばご研究頂きたいと思います。

密室度の高い現代社会の隠れたところや死角の或る場所での子供達の受難についても、“灰色の領域”が積極的に動かねばならない気がしま

す。

中世ヨーロッパでは、子供は、小さな大人として扱われ（ダブダブの大人の服を着て）いたらしく、子供の人権概念は割と新しいと何かで読んだ記憶がありまして、これも調べたいと思っています。（2004.3.3）

人生について考える（5）

西山 覚（会員）

私は厭世的な人間なので死ということについてあまり考えたことがなかったし、自分が死ぬということについてもあまり実感がなく苦痛さえなければ何時死んでもかまわないと普段から思っていました。去年の暮れに大病をして病院に入院して、からくも一命をとりとめてからは、人生観や価値観が大きく変わったような気がします。

死ぬことなんか怖くなかったはずなのに病気で身体に激痛がはしるたびに死に対する恐怖に怯えました。死にたくないという気持ちでいっぱいになりました。何故でしょうか？

おそらく人間には全ての生物と同じく生存欲、生の本能があるからだと思います。

人間は欲望の状態、身体の生理的状态によって機械的に意識が決定されるわけではありませんが本能によって精神状態が大きく制約されるのは間違いないでしょう。

ただ身体の穏やかなときには相対的に意識、精神は自由に幅広い範囲のことを考えたり想像したりできるのだと思います。

自分が、かくありたい、かくあろうと思ってもいざ現実にその事態に遭遇した時には違った反応をすることがよくありますが、不思議なことです。

その時その場によって感情が予想もできない

反応を示すのです。かつて経験したことについてはどのようなことになるのかだいたいの予想はつくのですが初めてのことについては行き当たりばったりで予想がつかません。

かつて経験し、学習したことについてはある種の観念を持ち価値観が形成されますが、しかし、価値観を持つことと能動的に行動することは必ずしも一致しません。

私が大病する前に抱いていた観念や価値観は入院して病気に苦しむことになり大きく崩壊することとなりました。私の観念や価値観は大きく修正され、なんとか無事に退院できてホッとしたものの精神的空白状態になってしまいました。病苦と死に対して不安と恐怖の感情でいっぱいでした。病苦の体験が色々な感情を生み今まで持っていた感情を修正し、今まで持っていた観念や価値観、行動のパターンを修正しました。

もう今までどうりのやり方では生活していくこと生きて行くことが出来ないという観念が生まれてきました。

つまり、大病という危機が突然訪れ、継続していた生活が遮断され別の新しい生活を強いられることになったのです。

人間観というものも大幅に修正されました。新たな問題意識が生まれました。問題のたて方

が具体的に変わったような気がします。しかし、残念ながら私の厭世的な性格はかえって打ち固められ、人間不信も強化されたような気がします。

人間にとって醜い部分や悪とされる面も生物の生存欲や本能からすれば理にかなった部分もあるように思うようになりました。現実とはグロテスクなものです。しかしその中で生きていかなければ、生活していかなければならないのです。

人間関係の中で、社会的諸関係のなかで精神的葛藤を繰り返しながら生活していかなければならないというのは人間の苦悩の中でも最大の苦しみと言わなければならないでしょう。

人生とは闘争することであり戦いの連続です。苦しむことを通じてしか人間は喜びを見出せない存在なのかも知れません。何か完成した関係、状態として幸福というものは存在するのではないとおもいます。

石器時代の人間と現在の人間とどちらが幸せなのかという問いをたてるのは、現在の人間と千年後の人間とどちらが幸せなのかという問いをたてるのと同じぐらい馬鹿げた質問でしょう。個人として幸せを相対的に比較することによって幸、不幸を判断するというのも間違っています。

「現実を止揚する運動を共産主義という」という言葉がありますが、いま/ここにおいて、対等の立場で連体し、問題を解決していく相互の過程の中に幸福のモメントがありますが、これも全ての人が幸福になれるわけではないので、結局、自分を救うことができるのは自分自身だけなのかもしれません。

全ての人を救うことはできません。世の中にはどうしても救済することのできない不幸というものも存在し続けるのかもしれない。一度失われたもの、一度破壊されたものは二度と元には戻らない場合もあるのです。必然的に不幸になる場合もあれば、偶然的に不幸になる

場合もあるでしょう。世の中にはとことん運のない人もいます。

ある意味で死というものは人生の終わりであると同時に色々な意味での苦悩の終わりであり最終的な救済でもあるのかも知れません。

個人の死は死んだ人、個人、の悲しみではなく故人を思う、残された人々にとっての悲しみなのです。悲しみや喜びは生きているときにだけ味わうことができるのです。

この世で生きていこうという意欲は死の受容をいかに受け止めるかという問題と関係が在ると思いますがそれは単にいかなる理念をもつかという観念的な要素だけではなく意識を拘束し制約するところの歴史的要素、つまり時代的制約と密接に関係してくるように思われます。

自らの意志で人生をよりよく生きようと思慮する人は最終的に孤立することを恐れてはならないでしょう。誰にも理解されない場合もあります。

ひとりよがりて孤立する場合もあれば、真理を語って孤立する場合がありますが、死んだ後に歴史の裁定に身をゆだねる覚悟がいます。

世俗的利益を優先し、孤立を恐れて集団のなかで孤独を味わう人のなんと多いことでしょう。どのような生き方をするかは誰にも強制できないことすし、どのような生き方がただしいか、どのような生き方をすべきかはその人が決めるしか方法がないのです。

よりよく生きようとして自分で自分を苦しめている「かくあるべし」という傾向の強い人もいますが苦しくても自らの信念を優先する人もいますがこれも自分で決める意外方法がありません。いますぐ実現しなくても将来の人に望みをつなげていくこと、未来との連関を重視して希望を託す、これも一つの生き方だと思います。

ところで今まで思考してきた人生についての記述については人生があまりにも抽象的な思考の連関として捉えられており現実の進展過程とい

うものを度外視しているように思われます。つまり、人間を動くもの、実践するもの、生産するものとして現実的に把握しようと思う時には人間を固有名詞の世界で生きている存在として把握する必要があります。

兎に角、思考過程と生活過程を切り離さないことが重要です。思考と生活を切り離してしまうと頭の中だけのどうどう巡りに陥ってしまうからです。

思考と生活の関係について考えてみましたが、人間について考えたいと思います。

私は「人間達は生活をする」(田畑氏)という端緒規定の言葉は以前読んで記憶していましたが充分理解は出来ていなかったようです。人間の生活過程のなかに目的を見出すこと、生きている今、ここ、の瞬間の過程を目的として生きて行かなれば何時人生が終わっても怖くはないようですね。

ところが生活過程を目的に到る手段として捉えた場合には死は恐怖の対象となり、何時までたっても目的に到達しないという虚無感、ニヒリズムに陥るようですね。

人間関係を手段ではなく、目的として捉えるということを今までの私は充分実践できていなかったように思います。色々な意味で臆病な弱い人間というのは時として自己中心なことしか頭に浮かばないようですね。

確かに何かに集中して作業、実践をしている時には他の雑念は消えています。神経を集中するといえば、人間は自分の悩みに関心が向いているときには他者への配慮に欠けた自己中心的な存在者になるように思います。

生活をしていく上で必要なことは絶えず実践と反省の往復運動を繰り返すことのようなのですね。それから人間の歴史についてですが人間の歴史に果たして目的があるのか、個人の人生にも目的というものがあるのかどうか、というのも大きな問題ですね。

人間の歴史を総体的に把握しようとするれば主観的な目的という概念だけでは把握することは出来ないと思います。歴史は人間の主観的な意識を介しながらも社会的諸関係の総体としての人間の、社会的存在としての人間の生活過程の進展、展開の歴史です。

人間の意識だけではどうすることもできないものでもあります。逆に意識自体が歴史的に社会的諸関係によって規定され、制約を受けているということを忘れてはならないでしょう。私は大病をして一度死にかけましたが、退院して思ったことは人間の寿命はわからないものだというのですが、だからこそ何時死んでも後悔しないように一日一日を大切に生きていきたいということでした。

運動誌・研究誌

◆哲学学校の会員や参加者の中には、それぞれの関心からさまざまな市民運動や研究会に参加・運営をしておられる方がいます。そうした方々が、お書きになった文章や活動紹介を兼ねて出版物などを送ってくださいます。最近はそのようなものをいただきました。会員交流の一助としてご紹介いたします。(※各連絡先を知りたい方は哲学学校事務局までお問い合わせ下さい)

●『ニューズ・アソシエティブ』第211号、経済研究会発行

「極東アジアの地政学」「新たなバブル突入のアメリカ経済」ほか

●『季報・唯物論研究』第87号「特集・九州王朝説の現在」、季報『唯研』刊行会発行

責任編集・藤田友治(本校会員)・室伏志畔、巻頭エッセイ・山本晴義(校長)、ほか

●道路公害から生活をまもる『みちしるべ』第28号、阪神間道路問題ネットワーク発行

「道路通れば文化ひっこむ」「コミュニケーションを欲している住民」ほか

ある国の話

上野山 定由（参加者）

王様 神様におなりください
無礼なやからは 王様が自分たちと
おなじ人間だとおもうと 暴れだすのです

国土は乾燥していて 人の心は荒んでいました
遠征から帰られたばかりの王様は
砂埃にまみれた立派な髭を ぴくと動かして額かれました

美しい妃も 可愛い王子も遠ざけられ
数人の侍従とともに 神殿に籠もられた王様は
誰にも お姿をお見せになりませんでした
大臣は御触れを出しました
神の化身であられた王様が 再び神にもどられ
これからは 神の座から この国を御守り下さる
国民は哀心より 神の御加護をお祈りせよ

反乱の知らせをうけると 大臣は王様になりかわって
いくさの先頭にたち 大声で神の名を唱えながら突撃しました
恐れをなし 戦わずして敵は降伏しました
時をわかつたらずるところで 唱えられる祈りの声は
空に響きわたって雨雲をよび 国土はうるおい
人の心も和やかにになりました

遠くから 祈りの声が聞こえてくる神殿で 王様は眩かれました
高貴なものは 孤独に耐え忍ばねばならない

神になったものの 自分自身への生け贄である
平和のうちに永い歳月はすぎ ある夜ひそかに侍従が
大臣の部屋を訪れ 王様の死を告げました

人に知られないよう 大臣と侍従との老人たちだけで
月明かりの真夜中 質素な棺を森にはこび 穴をほり
侍従たちも 穴のなかで棺をとり囲むように坐り 毒を仰ぎました
しんとした森のなか すでに腰が曲がっている大臣が
一人で 墓穴に土をなげこみ 土が棺にあたると
バサツという鈍い音がしていました
明け方 邸に帰りついた大臣も 息が絶えました



二一世紀の倫理を求めて

善積 弘幸（会員）

『季報 唯物論研究』に高橋準二氏の「道德感情と倫理学の課題—アダム・スミス『道徳感情論』を手がかりに」（『科学知と人間理解』第五章）を紹介した。何かメリハリのない文章だった。だが不満が残ったものの、その中にヒントもあった。

それは、「第四節 目的と手段—自然の欺瞞から出発して」からであった。私は、そこで氏の文章を引用しながら、次のように考えを展開している。

氏（高橋・筆者）は、まず、スミスは《富への欲求は、人間の自然的欲求から生じているのではなく、「虚栄」という競争、すなわち人々に同感と好意をもつて是認してもらいたいという気持から生じていると見る》と述べています。そして、人間はどのように容易に欺かれるかという《彼（スミス・筆者）によれば、それは目的と手段の転倒という傾向性ゆえなのである。ヒュームの指摘にヒントをえて、自分が初めて注目したのだ》《これがスミスの指摘する人間生活の真実であり、元来の目的よりも目前の具体的手段に執着する人間の傾向性なのである》とも言っています。

このように、アダム・スミスの「利己主義」に注目しつつ、「自然の配慮」「見えない手」「神の智慧」という表現の中に、このような氏の構想が示されています。

この「見えない手」「神の智慧」という言葉は『国富論』でも、有名な概念であるが、彼の思想の中には、「神（一神教的人格神）」よる「人類の予定調和」という楽観論があったのではないか。また、彼が生きた時代（1723～1790）にも、

それがまだ残っていたと考えられるのである。

このように、『道徳感情論』が終わり、高橋氏の批評がそれをなぞっただけなら、面白味も新しさもないのだが、氏の論は、最後に突如転調する。ここに高橋氏の真骨頂がある。その部分の私の要約を引用しておきたい。

人々は、自然に欺かれて行為するが、「見えない手」に尊かれて、総体として意味のある結果を生み出すと解していいだろうと高橋氏はこれまで「利己主義」に重きを置いてきたのであるが、最後の方では《しかし、この楽天的期待は、二一世紀中の事実によって崩されるだろう》と「倫理学の再構築」において、アダム・スミスの『道徳感情論』だけでは、乗り越えられないとも氏は言うのです。だが、氏はこれを決してスミス個人の責任にしません。単なる否定で終わっていないのです。氏は、次のようにも言います。

だから、《スミスが肯定的にとらえた社会秩序と人間行動を、今度は批判的にとらえ直さなければならぬ》とも氏は言うのです。けれども、それは《スミスの理解の枠組みが違っていたのではない。彼の時代と比べて（というより三〇年前と比べてさえ）価値基準が逆転したのであり、そこから、われわれの行動の徳と悪徳は根本的に再検討されねばならないことになったのだと氏は言います。

だから《今日の社会的現実において、新しい時代を導くような社会科学の建設が求められるに違いないと思われるが、その際、アダム・スミスが『道徳感情論』で行ったような人間像の分析を新たな次元で行うことが不可欠であろう》

と結論づけるのです。

そして、そういう結論から《個人の生存の不確実性を個人を超える人間のつながり(アソシエーション?・善積)によってカバーすることによって、当の個人の寿命を超える未来を彼の意識の中に構想しうるのである》という指摘も出てくるのでしょう。(中略)

そして、最後には、《自然と人間社会に関する知識を、このような行動のための知識として広範な利用に供することは、二一世紀の科学の課題であろう》としめくくるのです。

これが若くして逝った高橋氏の遺言といっは言いすぎであろうか。氏は「二一世紀の科学の課題」と言っている。なぜ「哲学」ではないのだろうか。それは、氏が、やはり「科学の人」だったからではないだろうか。しかし、これは蝸壺に入って、情報公開、相互交流が、だんだんできにくくなっている「科学」に可能だろうか。私は百科全書派敵知識の広さと「愛知者」の思索の深さが必要ではないかと思う。それを思う

とき、高橋氏の「死」が、いかに大きいかを痛感せざるを得ない。(2003.12.29)



※高橋準二(1941-2001)さんは、科学史がご専門で、大阪音楽大学で教鞭をとられる一方、『季報・唯物論研究』編集委員、二一世紀研究会代表世話人として活躍され、大阪哲学学校会員でもあった。著書の出版を企図しながら癌にて急逝。遺された諸論考を編集・発行したものが本書である。購読希望者はお問い合わせを。

会員著書の割引販売

山本晴義『対話・現代アメリカの社会思想』

ミネルヴァ書房、2003年10月刊行、定価2800円+税

※著者割引価格2500円(税込)にて希望者に頒布

高橋準二『科学知と人間理解』

新泉社、2002年9月刊行、定価2300円+税

※著者割引価格2000円(税込)にて希望者に頒布

森 信成(解説・山本晴義)『唯物論哲学入門』

新泉社、2004年2月刊行、定価1800円+税

※著者割引価格1600円(税込)にて希望者に頒布

●申し込み・問い合わせは催し受付またはkihou-ha@xpost.plala.or.jpまで

NPOを起業してみても

関口 敦男（会員）

昨年3月でとうとう失業生活1年を迎えました。そんななか毎日通っていた職安で、「NPO（特定非営利活動法人）起業科」の職業訓練募集の案内を見つけました。この職業訓練は職業能力開発機構の委託で「茨城NPOセンター・コモンズ」が行うものです。募集は15名程度、訓練期間は5月から7月まで3ヶ月間、県内NPO（特定非営利活動法人）の視察、起業計画、広報、会計、プレゼンテーション等の訓練を行いました。

この職業訓練には、13名の応募があり、その多くは定年後を市民活動で、という50代、60代の男性が比較的多く集まってきたのが印象でした。一方、NPO（特定非営利活動法人）の方でも、主婦中心のボランティア活動から、法人化にともなって、企業の中でのマネジメント経験のある人材を求めているのも事実です。継続的、組織的に活動を進めるための財政の問題、ボランティアなどの人を組織するマネジメント能力が法人化に伴って必要になってくるのですが、そういった問題を多くのNPOが抱えています。

そういった訓練を受けながら地元のNPOの視察を通じて、知り合った人とNPOを設立することになり、11月に設立総会、12月に設立認証申請、2月に県の認証、法人登記という形で早急にNPOを立ち上げました。

NPOを巡る状況の問題点

特定非営利活動促進法（NPO法）が施行されて、2003年12月1日で5年になります。この間、約1400の特定非営利活動法人（NPO法人）が誕生し、その設立傾向はさらに活発になりつつあります（2004年4月29日までの累計で全国の申請数17,163、認証数15,578）。こ

のことは、NPOという考え方が日本社会に着実に受け入れつつある証拠と考えることもできます。

しかし一方では、手放しでは喜ばない状況が存在します。確かに近年、日本では非営利組織への期待が集まり、特定非営利活動促進法をはじめとして、非営利組織を積極的に組み込んだ政策が中央省庁や自治体ですすめられています。その考え方は要するに、民営化による政府部門の縮小と、政府部門への市場原理導入による顧客満足向上を原則にすえているといえます。そして非営利組織は、政府部門の業務が外部化された際の一つの受け皿、「新しい公共」の担い手と考えられています。しかも財政難を背景として、特に非営利組織にはボランティアの無償労働力や民間寄付金が期待されているのも事実です。

こうした効率性の重視と財源のシフトは積極的な面もありますが、「公共性」という点からみると危うさがあります。

非営利組織は、政府の財政難や長期不況を背景として補助金・助成金の伸びが期待できず、しかも組織数が急増していることから、補助金や助成金の獲得競争が激化するとともに、自ら事業を行って収入を稼ぎ出す必要にせまられています。

こうした非営利組織の財源における事業収入ないし民間寄付の割合が増大することによって、採算に乗らない事業が忌避されたり、資金提供者の意向に影響を受けたりするおそれがあります。

今後、非営利組織の公共性を社会全体でどう保障していくかという議論が深められる必要があります。

【参考資料】

以下は、関口敦男さんが起業にかかわられたく地域資源を活かすNPO「リ・フレッシュ」が発行する、活動紹介のためのリーフレットです。

この団体の顔となる主な役員は次の方です

- 理事長 鈴木 金一郎
茨城県手をつなぐ会の会長
青少年健全育成市民の会会長
- 副理事長 山形 克己
北茨城県議員
花畑区長
- 副理事長 山崎 寛一
北茨城自然環境研究会会長
北茨城山形町研究会会長
そば道場店主
グリーンツーリズムインストラクター
- 事務局長 関口 敦男
グリーンツーリズムエスコーター
NPO総務科
- 理事 大岩 順一
フラワーデザイナー
元花店経営
- 特別顧問 中山 晃先生
ランドスケープデザイナー
フラワーデザイナー
花キユービット



T 319-1638
茨城県北茨城市華川町小豆畑1115
TEL/FAX 0293-46-6743
携帯 090-8088-3277

(関口まで)

e-mail aekiguti@ica.hidecnet.ne.jp

年会費

一般会員 個人 ¥2,000
 団体 ¥2,000
賛助会員 個人1口 ¥ 5,000
 団体1口 ¥10,000
 (1口以上)

地域資源を活かすNPO



「リ・フレッシュ」は地域の資源として、人や物、文化、農地や自然、または個人の技術など、あらゆる資源を見直し、地域の活性化を進める非営利活動団体です。



会員著書新刊案内

田畑 稔『マルクスと哲学』

(大阪哲学学校参与、大阪経済大学教授／哲学)

新泉社、2004年4月末刊行予定、定価4500円＋税

※著者割引価格4000円(税込)にて予約受付中です

第1章[哲学] 哲学に対するマルクスの関係・四つの基本モデル／第2章[意識] マルクスの意識論の端初規定／第3章[構想力] 解放的構想力と実在的可能性／第4章[唯物論] 「哲学の外への転回」の途上で一前「唯物論」期マルクスの「唯物論」把握／第5章[移行1] 「唯物論」へのマルクスの移行／第6章[移行2] バリ期マルクスと仏英の唯物論的共産主義／第7章[批判] マルクスと「批判的唯物論的社会主義」／第8章[物件化] 唯物論批判と「物件化」の論理／第9章[国家] マルクス国家論の端初規定／補論1 [エンゲルス] エンゲルスによる「哲学の根本問題」導入の経緯—シュタルケとエンゲルスの『フォイエルバッハ論』／補論2 [国家哲学] 東ドイツ哲学の歴史的検証

●申し込み・問い合わせは催し受付または kihou-ha@xpost.plala.or.jp まで

死を解く鍵は「永遠」なのか

— 広井良典『死生観を問いなおす』

平等 文博 (会員)

養老孟司の『バカの壁』をめぐる討論会開催が決まったが、実のところまだそれを読まずに“黙殺”していた私は、観念して古本屋に出かけた。残念ながらお目当てのものはその店になく、後日新本にて養老氏の印税収入に寄与せざるをえなくなったのだが、ここで述べたいのはその『バカの壁』についてではない。手ぶらで帰るのもつまらないと古本屋で目にとまり購入したうちの一冊、広井良典『死生観を問いなおす』(ちくま新書、2001)についてである。

著者は、厚生省の役人を経て大学の教員になった社会保障政策やケアの問題についての専門家であるが、高校生のころから「哲学的」と呼べるようなテーマについてあれこれ考えるようになり、大学では科学史・科学哲学の学科で学び、また友人たちと「哲学研究会」で議論を重ねたという「哲学者」でもある。

その彼が、人口高齢化の結果としてわれわれがこれから迎えることになる「死亡者急増時代」を前にしながら、現在の日本においては、とりわけ若い世代において「死生観そのものがほとんど「空洞化」している」ことに危惧をおぼえつつ、死生観についてわれわれがきちんと考えるためのいわば叩き台、「導きの糸」となるべき試論を提供しようとしたのが本書である。

「死生観というものの核心にあるのは、実は「時間」というものをどう理解するか、というテーマなのではないか」(p.23)と述べているように、彼の議論の特徴は、「時間論」を基軸にして死生観を語るという点にある。つまり、生まれてから死ぬまでのライフサイクル・イメージを「直線的な時間」においてもつのかそれとも「円環的な時間」においてもつのか、時間を一元的な

ものと見るのか重層的なものとするのか、また核心のテーマである「永遠」というものをどうとらえるのか、などをめぐる議論の流れを、「時間」についての意識が深化してゆく「旅」にみたて、「第一の旅 現象する時間と潜在する時間」「第二の旅 老人の時間と子どもの時間」「第三の旅 人間の時間と自然の時間」「第四の旅 俗なる時間と聖なる時間」というふうに本書は展開される。

その過程の個々の議論や知見からは、たとえば「第二の旅」で語られる“人間の三世代構造”の話など、多くを学ばせてもらった。しかしながら、議論の大きな枠組みにおいて、つまり著者の主題が“永遠”とは何かという点に収斂し、「死」を最終的には「永遠」として説くというその基本的な構造に、私は違和感をおぼえざるをえなかった。

プロローグで著者は、「死生観」とは何かについて、「私の生と死が、宇宙や生命全体の流れの中で、どのような位置にあり、どのような意味をもっているか、についての考えや理解」「私はどこから来てどこに行くのか」という問いに対する一定の答えを与えるもの」と述べている(p.12)。つまり、「宇宙や生命全体の流れ」、「どこから来てどこに行く」という枠組みが初めに敷かれ、その当然の帰結としていくつかの媒介項を経ながら「永遠」の問題へと死の問題が収斂していく仕組みになっている。

著者の言う「永遠」とはもちろん、時間の無際限な直線的延長や堂々巡りとしての「永遠」ではない。時間そのものを超えた「超・時間性」「無・時間性」としての「永遠」である。そのような「生＝時間のある世界」を超えた「絶

対的な無」すなわち「絶対的な有」である「永遠」こそが、「私たちがこの世の生を終えた後に戻っていくところ」「たましいの帰っていく場所」(p.206)だというのである。誤解がないように、ここで「場所」と言われるのは、天国や極楽といったいわゆる「死後の世界」のことではない。著者は、「死後の世界」という発想は、「直線的な時間」を絶対的なものと考えそれを死後に延長させるところに生まれるにすぎないと批判している(p.200)。つまり彼がしているのはあくまでも「哲学的」な議論なのである。だが、「永遠」についてこのように「哲学的」に論じることが、はたしてわれわれの「よき死」=「よき生」として肝要なことなのだろうか。

たとえば、先に述べた「死生観」とは何かという著者の説明に欠けていると私が思うのは、「人と人との関わり」の視点である。まずもって他の人間たちとの関係存在であるわれわれは、個体の発生からしてそうであるように、自らの生と死の意味をその関係のなかから、その関係において見出さざるをえない、自己完結しえぬ生き物である。たとえば、第三者の精子提供によって生まれた子どもたちの多くが、人格形成の途上でドナーに会いたいと求めるのは、単に自分の遺伝的ルーツを知りたいということ以上に、いかなる人の関わりが自らの存在(生)の端緒にあったかを確認したいという思いからであろう。したがって、どのような質をもった人と人との直接・間接の交わりを生きるかという問題が、われわれの死生観において中心的な位置を占めるのではないだろうか。これは「哲学」だけでは解きえない問題である。

著者も、「個人としての人間の生—「私(の生)の時間」—は、私をとりまく人々と共有する時間、すなわち「コミュニティの時間」とのつながりをもってこそ、充実した意味をもちうるように思われる」(p.124)と述べるように、他の人間との関わりを見ていないわけではない。しかし、彼の関心はあくまでも「時間論」にある。「他者」

とのつながりとは、「コミュニティの時間」とのつながりという問題でしかない。だからそこでの議論の流れも、私も死ぬが他の人々も死ぬのだから、「私だけが“この世界”に残って何になるだろう」(p.125)と考えると「私の生(の時間)の有限性は、それ自体として絶対に受け入れ難いものではなく」という、重要ではあるがごくありふれた考察にとどまる。

遡って考えれば、どうして若い世代において死の意味がわからず、同時に生の意味づけもよく見えないという「死生観の空洞化」現象が生じているのか。著者は、「日本人の伝統的な死生観」をなお意識の底に保持する年配世代とも、物質的な豊かさが生きるモチベーションとなりえた団塊世代とも異なり、物質的な富の過剰の中で「生きているという実感」がもちにくく「生きていくことの意味が」見出しにくいことを理由にあげる。しかし問題は、「物質的な豊かさ」それ自体というよりも(その中身の問題は確かに大きい)、むしろ人と人との関わりがとめどもなく商品関係によって置き換えられ、また自分自身も労働力「商品」として熾烈な市場競争原理にさらされるなかで、人間としてもつべき「社会力」(門脇厚司)がどんどん衰退していきつつあること、すなわち人と人との交わりの貧しさこそが、「生きる意味の喪失」=「死の意味の喪失」をもたらしているのではないだろうか。

そのことをふまえて、果たして人間は「永遠」のうちに生と死の意味根拠を見出すのであろうかと問えば、私は否と答える。われわれは時間性を超越することのうちにではなく、有限な時間の内部で、過ぎ去りし者たちと今関わる者たちとこれから来るべき者たちとの関わりにおいて、自らの限られた生をより意味あるものになりたいと願い行動するのである。

「永遠」こそがよき死にとって肝要な問題であるとする考えは、生の意味を喪失した疎外された意識の産物であろう。「哲学」もまた、そうした疎外された意識に与するものとなりうる。

大阪哲学学校の予定

- 4月10日(土)午後1時30分～5時30分ごろ
討論会「なんでやるー『バカの壁』超308万部」



司会・問題提起: 破僞否偈弥徹さん(運営委員)
報告: 松尾猛省さん、高根英博さん、参加者の皆さん

- 4月25日(日)午後1時30分～5時30分ごろ ※曜日にご注意!
「古代史最前線—放射性炭素年代測定法の影響、「君が代」の源流」
講師・藤田友治さん(歴史・哲学研究所長、大阪経済大学講師)

【講師より】

日本の古代史学界に激震が走った。弥生時代が従来の年代観(紀元前五世紀)より500年も早まり、今から3000年もの前から始まるという、国立歴史民俗博物館の研究発表に接したからです。日本の古代史にたいする根本的な認識を変えざるを得なくなる事態です。縄文時代にも影響がでるのは必定でしょう。

放射性炭素(C14)年代測定法だけでなく、最近いっそう精密になってきた年輪年代測定法を加えたこれら二つの科学的測定法による一致した研究結果が、古代史学界にこれだけの激震を与えたのです。これが正しいとすると、稲作の伝来は北九州においては、3000年前に遡ることとなります。これに対して、なお慎重な検討が必要なことはいまでもありません。

本講座では、先の科学的測定法はいったん脇に置いて、3000年前からの日中交流史を文献上探索し、知り得た事実を述べることで、今回の国立歴史民俗博物館の研究発表を吟味し、文献史学として真摯に応答し、その影響を考えたいと思います。

文化交流は実は、孔子の見方にも影響を与えます。哲学の認識にもかかわるのです。

さらに、「君が代」は賀の歌と従来されてきましたが、実は「挽歌」(葬儀のときに、悲しみに満ちて歌う歌)であるという新説を発表した話題を提供し、ともに哲学的思想的に考察したいと思います。

- 5月8日(土)午後1時30分～5時30分ごろ
「共同幻想・幻想史学—批判の視点をどこに置くか」(仮題)
講師・室伏志畔さん(古代史研究者)

- ◆ 場 所: 尼崎労働福祉会館(阪神尼崎駅下車、駅西の南北道路を道沿いに北へ徒歩約8分)
- ◆ 参加費: 一般千円、維持会員五百円
- ◆ 予約等は不要です。直接会場までお越しください。